

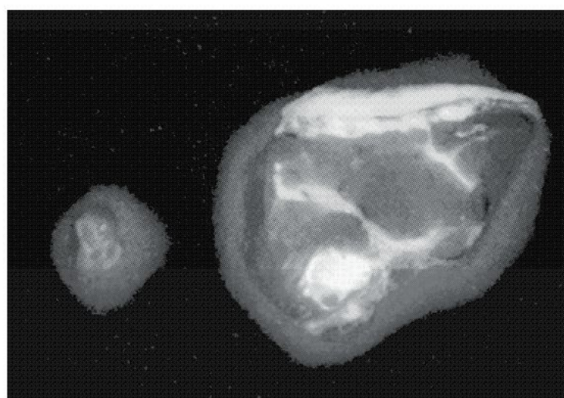
世界で初めて乳がん細胞を光らせる可視化やCT（コンピューター断層撮影）装置での被ばく線量をインターネットで管理するシステムの開発、大分大学と東南アジアの大学や病院との連携など国際的な話題が目立った2015年の大分県の医療。竹田市の救急体制整備や県立の精神科設置など、医療体制の充実にも道筋が見えた一年だった。今年を振り返る。

被ばく線量 ネットで管理

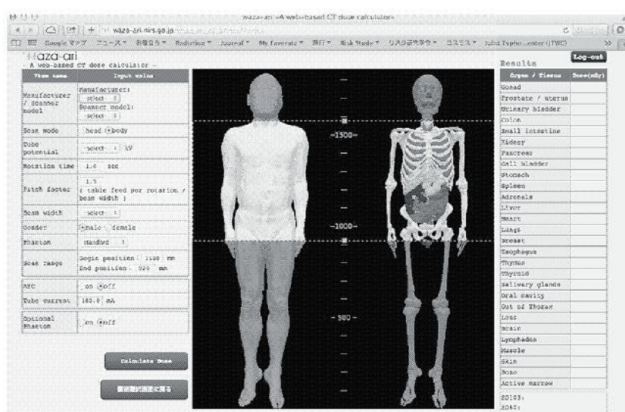
乳がん細胞光らせ可視化

九州大病院別府病院（別府市、三森功十院長）とうえお乳腺外科（大分市、上尾裕昭院長）らの研究チームはスプレー型の試薬を吹き掛けてがん細胞を光らせて可視化することに世界で初めて成功した。将来的には、手術時間の短縮や微小がん

の取り残しを防ぎ、再発のリスクを減らすことが期待されている。生殖機能に関わる部分を摘出したり、放射線治療で生殖機能を失う可能性があるがん患者の精子や卵子などを凍結保存し、将来的に妊娠を希望する際に融解して妊娠を



スプレー型の試薬を吹き掛けて光る乳がん細胞



被ばく線量を測定するシステム「WAZA-ARI」の画面

支援する組織が立ち上がった。最初の取り組みとして、うえお乳腺外科とセント・ルカ産婦人科（大分市、宇津宮隆史院長）が中心となり「おおいた乳がん・生殖医療ネットワーク」が発足した。

放射線医学総合研究所など国の研究機関と県立看護科学大学の甲斐倫明教授は、CTの利用による患者の被ばく線量を計算し、インターネット上で管理できるシステムを開発し、運用を始めた。放射線の影響でがん化の



サージカル・ロボで腹腔鏡手術の研修を受ける学生ら。大分大学全学研究推進機構学術映像部門提供

連携や派遣…体制充実へ道筋

リスクを伴うCTの適正利用や医療被ばくを最小限にコントロールする指針づくりに役立っている。マウスガード装着でかみ合わせを調整して体幹やバランス感覚を改善する「スポーツ歯学」の分野では、九州初の研究所がタカサゴデンタルオフィス（大分市、近藤剛史院長）に設立された。フロアスリットからスポーツ愛好家まで幅広い層にスポーツ歯学の重要性を伝える他、高齢者の日常生活での動作改善や転倒

防止にも成果を応用していく。大分大病院（津村弘院長）は、2025年に65歳以上の5人に1人が認知症と予想される超高齢社会を見据え、認知症先端医療推進センターを設立した。三つの診療科が協力して医療と介護の連携の在り方、症例や新薬の開発の研究に当たる。重度の心不全で心臓移植が必要な患者が手術までのつなぎとして、血液を全身に送る補助人工心臓（VAD）。在宅でも使用できる植え込み型の手術に県内で初めて成功した。同病院薬剤部は薬剤師の不足が深刻化しているへき地の病院へ薬剤師を派遣することを始めた。薬剤師の派遣は全国でも珍しい。

大分大医学部（守山正胤医学部長）は、フタヤヤギなどの中型動物で内視鏡などの手術器具の実習ができる「サージカル・ラボ SOLINE（ソリン）」を設置した。若手や海外から研修に来

た医師の教育、産学官協同での医療機器開発に役立っている。経済発展に合わせ、国民の医療への関心が高まっているタイやベトナムなど東南アジアの国の医療技術向上に向けて、医師の派遣や研修の受け入れなどを進めている。県内医療機関で初めて初期胃がんの内視鏡治療をベトナムに生配信するなど新しい取り組みも進めている。

入院が必要な重症の救急患者を24時間・365日受け入れる「二次救急医療体制」。県内で唯一空白地帯だった竹田市で来月4月から解消する見通し。竹田医師会と大久保両病院が連携して約9年ぶりに再開する。県は、精神疾患がある患者を対象に夜間や休日の救急対応に当たる県立の精神科を開設する方向で検討に入った。精神保健福祉法で設置が定められているが、大分県は実質的に全国で唯一の未設置県となっている。（小田原大周）